

## ○日本文学会の発展を

「論究日本文学」第八十一号は本学会の五十周年記念号である。この発行が二〇〇五年であるから、この十年後、すなわち二〇一五年には六十周年記念号を、本学会が順調に推移しておれば、刊行しなければならぬことになる。ということは、その前年度から準備をする必要がある。五十周年記念号の巻末に付された第六十一号から第八十号までの掲載論文一覽を見ると何とも不思議な感慨に襲われる。と同時に先輩諸氏がよくぞここまで積み上げてこられたものだと感じたい思いにもなる。願わくば百号、百五十号の刊行を望みたく、刊行の暁には大過去の教員となつてゐる小生も彼岸から祝福の気持ちを抱えたい。

## ○日本文学専攻の動き

「国語国文学科」「国文学科」「日本文学科」「日本文化学科」。さらには「言語文化学科」「人間文化学科」「コミュニケーション学科」、はたまた「東アジア言語文化学科」などと、日本文学の研究組織の名称は変遷・流転を余儀なくされてゐるかのようで、そ

の都度、内外から過ぎ来し教学内容を回顧したり再検討がなされてきた。かつての文科大学から開かれた大学へ、さらには大衆化駅弁大学から大学院大学へと、時代と共に変化を遂げている。その中心の一つに「日本文学研究」があった。本文学部にもその波は押し寄せ、来年度から、現在の日本文学専攻は新しく「日本文学研究学域」として二つの専攻を抱えるかたちで再編成されることになった。一つは「日本文学専攻」で、他は「日本文化情報学専攻」である。前者は従来の文学研究を基本としていて、今までとさほど異なる教学内容ではないが、後者は名前の通り、研究対象がやや幅広くなる。つまり、日本語学と図書館学を柱として、その周辺にある文化現象をも取り込んで研究してみようという姿勢である。とは言ふものの、我々が作品研究をする場合、作品の言語事象や書誌を蔑ろにしたことはなく、むしろそのことをきちんと精査しつつ研究を深めることが基本であったし、書籍の流布や保管、販売や流通に関わることも含めて作品研究を展開してきたのである。写本の伝本や享受、研究史の諸相

研究は図書館学と表裏一体のことであ

つたし、近現代の作品研究の面でも緻密な書誌調査の上に華麗な成果が実つたことを知っている。使用されている言葉を分析することで成立年代が判明したり、言語の位相検討から時代潮流や文化を読み取る研究を積み上げてきた。そう考えるとこの二つの専攻の垣根はあまりに低いのである。

書籍の樹海に迷走しつつ、言葉の大海に沈潜しつつ、時に澄み切つた青空を見上げて夢を語ることを、我々の先人もしてきたし、またこれからの青年もすることであろう。これこそが文学研究の醍醐味であり、日本文学研究学域に飛翔する心根でもあると思う。

## ○新しい陣容

木村一信先生がご退職になったことはまことに寂しいことであつたが、この四月から田口道昭先生をお迎えすることになった。田口先生は石川啄木や与謝野晶子の研究分野の第一線でご活躍中の方で、本学の卒業生でもある。また、右の新学域のためだけでなく、本学の図書館教育構築の担い手として湯浅俊彦先生をお招きする事ができる。ともどもに本学会の慶事である。

(中西健治)